

1
時限

10:30
|
12:00

2
時限

13:00
|
14:30

3
時限

14:45
|
16:15

A 会場

中国文学にあらわれた処世観と自然 —張衡「帰田賦」を中心に—

鈴木 崇義 准教授 (中国古典文学)

人は、人との関わりなしに生きることは恐らくできないでしょう。しかし、人との関わりが煩わしく感じられる時もあります。社会の枠組みを窮屈に感じることもあるでしょう。危機に陥ることもあるかもしれません。そんな時、自分はいかに生きれば、あるいは、どこに行けばよいのでしょうか。その答えの一つとして、張衡という人は「帰田賦」を著しました。本講義では「帰田賦」を端緒として、詩人たちが何に憧れ何を楽しみとしたのかを考えてみたいと思います。

小野小町・紫式部・和泉式部と中世の文学

岩崎 雅彦 教授 (日本中世文学・近世文学／古典演劇)

小野小町・紫式部・和泉式部の三人は平安時代を代表する和歌や物語の作者であるが、中世には三人にまつわる様々な説話や伝承が生まれてくる。説話の中で小町は老女となり、死後も骨となって歌を詠む。紫式部は『源氏物語』を書いて読者の心を惑わせた罪のために地獄に堕ちる。和泉式部は赤子の時に捨てた息子と再会し、親子と知らずに恋愛関係となる。室町時代にはこうした説話や伝承が能や御伽草子などの題材となって作品化された。

豊臣政権をめぐる通説的理解と新視点 ～秀吉の弟秀長の存在を中心に～

矢部 健太郎 教授 (日本中世史／戦国・織豊期の政治史)

豊臣政権に関する歴史的叙述は、研究者や歴史作家などによって数多くなされてきた。しかしながら、二十世紀までの通説には徳川時代の史料や歴史観によるバイアスがかかった部分も多く、近年では新たな視点による研究も提出されている。果たして、真の豊臣政権の姿とはどのようなものであったのか。2026年のNHK大河ドラマ「豊臣兄弟！」の主人公豊臣秀長に焦点をあてて、通説と新説の相違点やそれぞれの妥当性について考えてみたい。

B 会場

文法とは何か

水口 学 教授 (理論言語学・生物言語学・統辞論)

「文法」と聞いて学校で教わる英文法や古典文法を想像してつまらないものであると思う人もいるかもしれません。本講義では言語学の視点から文法を考察し、文法に対する新たな見方を提供したいと思います。学校で教わる英文法が実は科学的な文法研究の第一歩になることから始めて、文法がヒトであれば誰もが生まれながらに持っている自然物であることを明らかにします。そして文法が実際に生み出しているものを紹介し、科学的な文法研究へと誘いたいと思います。

景観から歴史を読み解く —歴史地理学という発想—

川名 禎 准教授 (歴史地理学・近世都市空間の研究)

歴史地理学と聞いて何を思い浮かべるだろうか。多くの人にとっては馴染みのないこの学問も、実は明治期から続く伝統ある学問であった。景観に刻まれた歴史を読み解くこと、それは歴史地理学が担ってきた重要な役割である。近年学問が多様化するなか、歴史地理学の存在意義が問われている。歴史地理学がもつ独自の発想は、必ずや既存の学問に新たな視点を提供する筈である。土地の履歴が語りかけるもの、それは現代を生きる我々へのメッセージである。

われわれにとって死とは何ものなのか？ —古代ギリシア哲学のさまざまな見解

木原 志乃 教授 (西洋古代哲学・古代ギリシア医学思想史)

死は何ものでもないから恐れるべきではないというエピクロスの主張は、われわれの不安を解消してくれるのか。死はわれわれにとって善きものを剥奪するゆえ、やはり恐るべき悪なのだろうか。このエピクロスのテーゼをはじめ、古代ギリシア哲学においては、「死」をいかに語るかという問いにさまざまなアプローチがなされた。ストア派の語る「よき死」、ソクラテスの死の意味、プラトンの魂不死論などにも言及しながら、彼らにとっての「よく生きる」こととしての哲学の内実を探りたい。

文学塾申し込み締切

令和7年3月13日(木)

※ A会場とB会場の同じ時限の講義を申し込むことはできません
※各講座 100名に達した時点で申し込みを締め切ります
※変更等が生じた場合、大学ホームページでお知らせします